

日本 — 見たまま

S. カランジャイ*

日本, 日出ずる国. この国の名前を初めて知ったのは, インド最大の詩人, 東洋初のノーベル文学賞受賞者, タゴールの書物からでした. 以来, 日本は私にとって夢の国で, ベンガルの偉大な作家, アナンダ・シャンカ・ロイの JAPANE (ベンガル語で「日本にて」) を読んだりして, まますます興味をかき立てられたものでした. けれどもその頃には, 私自身いつか日本へ来ることが出来ようとは思っておりませんでした. ブラーマン中流の出としては, 想像すらできないことでしたから. 私が天体物理学の研究を始めてから, 日本人がこの方面で, 特に輻射輸送論の分野で, ずいぶん貢献しているのを知るようになり, 宮本, 末元, 上野, その他諸先生の論文を読んで参りました. そして, そのため, 日本への興味はますます増してきたのでした. 私のこの長年の夢は 1975 年 1 月 30 日, 文部省の奨学生として大阪国際空港へ到着したとき, 実現いたしました.

私は, インド西ベンガルのシリグリ (紅茶の産地として世界的に有名なダージリンの近く) に生まれました. もともとは, バングラデシュの首都ダッカの近くの村の出身ですが, 父がインド分割の前に移住して来たのです. 1963 年にシリグリカレッジを卒業し, 1962 年に新設されたシリグリ近くの北ベンガル大学に入学して, 1965 年数学科 (特に天体物理学) の修士, 1969 年に「星の大気における非同調散乱によるスペクトル輪郭の問題について」と云う題で博士の学位を得ました. 1970 年以來, 講師として同大学に奉職しており, これまで内外の学術雑誌に 10 編の研究論文を, また一般向け科学記事 (主に天文学) 16 篇を書いております.

大阪国際空港についたとき, 私の心は喜びに躍っておりましたが, 一方では, はじめて訪れた未知の国のもろもろに不安をおぼえておりました. 永い間心の中では準備をしておいたつもりでしたが, 一向役にたたないのです. 同じ便で降りた他の乗客の後から入国管理事務所へ着いたとき, インドからおいでですか, 浦上さんが税関の出口でお待ちですよと話しかけられて, 真実ほっといたしました. 国を出る前に留学生掛の方に来て頂けるとは聞いておりましたが, 実際上どのようにして見合わせるのかと案じていたのです. その夜を南千里の国際学友会の宿舎に過して, 同じ留学生掛の佐々木さんにつれられて, 京都大学宇宙物理学教室に参りましたのは, 1975 年 2 月 1 日のことでした. 主任の川口教授の心の

こもった歓迎に本当に感激いたしました. 川口先生には, 教室のメンバーを紹介して頂いたり, 図書室に案内したりして頂きましたが, 沢山の書籍や雑誌を見てとてもうれしく思いました. 上杉先生にお会いしたのはその次の日でしたが, すぐに学問的な議論や, 研究計画について話し合うことができ, とどこおりなく仕事を始めることができました.

これまでにいろいろの方とお会いすることが出来ました. 日本のすぐれた天体物理学者の一人であり, 現在, 金沢工業大学の教授である上野先生とお会いしたとき, 先生は目下研究中の仕事についてお話し下さり, 向井, 上杉両氏と私とでいろいろ討論いたしました. 以来先生とは数回お目にかかっていますが, いろいろ天体物理学のお話などを伺っております. また, 川口先生にお誘い頂いて花山天文台へ行ったとき, 宮本教授にお会いいたしました. 花山天文台では, いろいろな器械についてとか, 研究中の仕事とかについて伺いました. また, 岡山天文台でも 3 日間を過し, 石田博士その他諸先生にお会いしましたが, そのとき, 太陽を望遠鏡で観測しました. それまで私にとって, 紙とペンとが研究の道具でありましたから, これははじめての経験で, 私の人生にとって記念すべき日でありました.

また, ムドン天文台のスマル博士と, マンチェスターのコパール博士が講演においでになったときお会いできたのもうれしいことでした.

日本へ来る前には, 日本についての私の知識は, 書物や記事によるものでしたが, 実物を見て, 想像していた以上の美しさを感じました. まず清潔さで, 誰もがちょっとした紙屑も散らかさずに, くずかごや適当な所へ始末しております. 家々は清潔で, ほどよく裝飾され, 手入れが行きとどいております. 家のたたずまいを見ますと, 日本人がいかに自然を愛しているかがわかります. どのような所でも花を植え, 盆栽を置き, ちょっとした所でも上手に美しく使われています. 高度の科学的経済的発展の結果がそこかしこに見られ, 殆どの人は車を持ち, 家々には冷蔵庫, テレビ, 洗濯機が備えられ, 現代科学の祝福を受けております. 人々は身じまいよく礼儀正しく, 比類なく親切です. この国で私の感じた唯一の困難 (もっとも最初の数週間のことでしたが) は, 食物と言葉でした. 私自身, インド国内に参りましたときでも, 他州の食物には馴れ難かったので致し方ないことでした. また, 来日前に多少は日本語の勉強しておく

* 京都大学宇宙物理学教室, S. Karanjai

べきでした。カルカッタの日本領事館では日本語を教えてくださいましたが、何分遠方でしたので利用することが出来ませんでした。実際ははじめの数日間は

“Water, water, everywhere

Not a drop to drink”

の心境でありました。最近多少はわかるようになり、ともかくにも日本へ来ることが出来、日本および日本人を理解することが出来るようになって本当にうれしく思っております。

書 評

望 遠 鏡

——美しい星の像を求めて——

広瀬秀雄著

(中央公論社、自然選書、B6判、193頁、980円)

標題の「望遠鏡」を一瞥すると、誰れしも堅苦しい内容をもった本だな、と思いこんでしまう。アカ抜けした表装にフト気を引かれ、手にとってパラパラッとページをめくり拾ろい読みをしてみると、大変にくだけて、

しゃれて、チョッピリ堅く、第1ページからあらためて読み直させる本である。

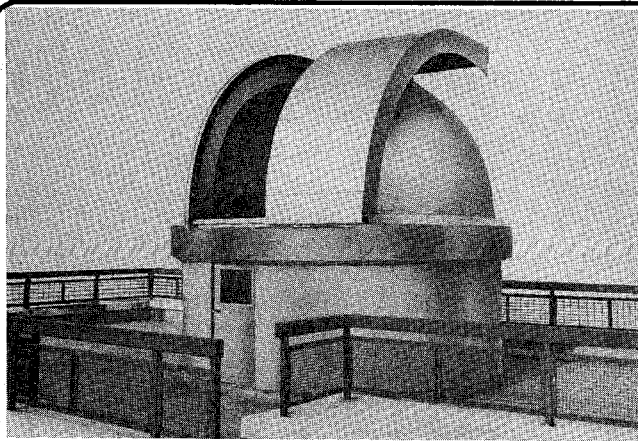
著者の詮索癖と博学と、そして夢と幻が洒脱な筆となり、楽しいエピソードをいっぱい盛った望遠鏡の文化史、望遠鏡の百科事典ともいえる本になっている。

『私の小さいころの双眼鏡といえば、ガリレイ式と相場がきまっていた。そのころよく見かけた口径5センチほどで、接眼レンズの枠に蜂のような小さな花卉形のマークのついた双眼鏡で、薄暮に見る外界の景色はみものであった。もうろうとした外界は、一度この双眼鏡を通すと、はっきり浮び上って見え、「ナイト、グラス」とはよくいったものだと感心したものである』

これは著者ばかりではなく、グッと皆々に通じる実感である。

『私たちが学生のころ、観測実習中に、曇りにでもなると、つれづれのまま木筒の口径8センチほどの望遠鏡を持ち出して、遠くの明るい窓などを見たものであった。大方の先生方もみなこんな前科をお持ちになっているらしい』

未経験者に対しては、天体望遠鏡とは、聖なる天界ばかりではなく、俗なる下界のすべての観測にも使用出来た



営業品目

- ★天体望遠鏡ならびに双眼鏡
- ★天体写真撮影用品及び部品
- ★望遠鏡各種アクセサリ
- ★観測室ドームの設計・施工



←LN-10E型
25cm反射赤道儀

★総合カタログ
ご希望の方は切
手300円同封お
申込みください

ASTRO 光学工業株式会社



〒170 東京都豊島区池袋本町2-38-15 ☎03(985)1321